

近世大名墓における本葬と分霊

— 弘前藩主津軽家墓所を中心に —

関 根 達 人

一 はじめに

古墳時代の研究において、古墳の規模や形態は、そこに葬られた首長たちの身分や首長間の政治的関係を説明するための手がかりとして重要視される。その際、古墳の形態と規模との関係は、しばしば、幕藩体制下の大名の「格」と「禄高」の関係に喩えて説明がなされる。古墳の変遷から、大王権力と地方首長との政治的関係の变化や、大王ならびに首長の性格の変質が論じられる一方、近世の大名については、豊富な文献史料などから、その位置づけが明らかたため、少なくとも近世史研究において、大名墓の在り方が大きく注目されることはなかった。しかし近世大名墓は、被葬者の没年や社会的地位が明らかであるが故に、墓標・埋葬施設・副葬品といった考古学的に認識される諸要素が、文献史料から判明する被葬

者に関する情報とどのような対応関係を有するのか、特段複雑な仮説を立てずとも検討することができる。

一般に近世大名は、国元と江戸、さらには高野山など、複数の場所に墓が築かれることが多い。さらに、近世大名の場合、転封などの理由で墓が改葬されるケースも少なくない。従って、ある大名家の墓について調べようとするれば、各地に分散する墓地を訪ね歩かねばならず、またたとえ訪ねていったとしても、基本的に墓地は今日なお旧大名家の個人管理下にあるため、十分な調査ができるとは限らない。こうした理由から、これまで近世大名墓は、個別の事例研究は存在しても、体系だった研究の対象となることはなかった。

近代以降、旧大名家による墓地の維持管理は、明治維

新と第二次大戦後にそれぞれ大きな危機に瀕し、江戸の町に営まれた大名墓の一部は、その時に失われた。特に戦後は、華族制度の廃止によって旧大名家による墓地の維持管理が難しくなったところに、都市の大規模再開発を受けて寺院の移転が重なり、東京都区内に所在する大名墓の改葬が相次いだ。しかし、その当時、近世の考古学に対する認識は浅く、改葬に際して正式な発掘調査が行われることは稀であった。

それでも、増上寺徳川將軍家墓所の発掘調査報告（鈴木・矢島・山辺一九六七）を嚆矢として、清泰寺岡山藩主池田忠継・忠雄墓所（鎌木ほか一九六四、岡山市遺跡調査団一九七八）、経ヶ峯仙台藩主伊達政宗・忠宗・綱宗墓所（伊東編一九七九、一九八五）、済海寺長岡藩主牧野家墓所（鈴木編一九八六）、寛永寺凌雲院御三卿清水家墓所（加藤ほか編一九九六）など、少ないながらも着実に発掘調査事例は積み重ねられつつあり、それらの成果は、近世大名墓の実態を知る上で基本資料となっている。また、近年では、松本健、谷川章雄、古泉弘氏らが発掘調査成果に基づき、近世大名墓の時期的変化や階層差について言及している（松本一九九二、谷川一九九一・一九九六、古泉二〇〇一）。

ところで、近世大名墓には、遺体が埋葬されている「本

葬墓」と、遺体を伴わない詣り墓としての「分霊墓」が存在する。これまで大名墓に関して示された見解は、全て本葬墓の発掘調査成果に基づいている。本葬墓と同数、あるいはそれ以上存在すると考えられる分霊墓についての考古学的調査は、青森県弘前市報恩寺の津軽家墓所（陸奥史談会一九五四）と、同じく和歌山県高野山遍照尊院の津軽家墓所（岡本・井上編一九八八）が知られる程度で、本格的な検討は行われていない。一方、大名の葬儀に関して、藩の公式記録や絵巻などに基づき、個別具体的な儀式の在り方を復元することが可能な場合もあるが、その場合でも、分霊がいかなる理由で行われたのかを史料から読みとることは難しい。支配の正統性と格式序列を象徴する記念物として大名墓を捉えた場合、本葬墓もさることながら、分霊墓に関する調査・研究を進める必要がある。

本論では、はじめに近世大名墓に関して、本葬ならびに分霊の在り方を考古学的見地から検討する。分霊墓については、国元と高野山の二箇所に分霊墓の考古学的調査がなされた、奥州弘前藩主津軽家を例に検討する。なお、津軽家の分霊墓については、重要文化財に指定されている長勝寺津軽家霊屋の解体修理事業に伴い、霊屋外へ一時搬出された遺品に関しても今回調査する機会を得

た。大名の霊屋は全国各地に点在するとはいえ、霊屋内部の遺品については、その性格上公表された例が極めて少ないことから、その調査成果について報告する。津輕家墓所の検討では、墓標や墓地の絵図面などを用いて、墓域の形成過程と構成原理の復元を試みる。最後に、大名の葬制全般に係わる画期とその意味するところについて述べ、近世大名の質的变化について考察する。

二 大名の本葬墓

ここでは、発掘調査事例に基づき、実際に遺体を埋葬した痕跡の確認された近世大名墓について検討する。なお、ここでいう本葬墓には、一次葬ならびに江戸時代に改葬された墓が含まれ、被葬者は、大名およびその正室・側室・子息女を対象とする。

【徳川將軍家墓・御三卿清水家墓】(第1表)

増上寺徳川將軍墓の場合、時期的な変化は、墓標・埋葬施設に顕著に現れている。すなわち、墓標は、霊屋+木製宝塔(二代秀忠)↓霊屋+銅製宝塔(六代家宣)↓霊屋+石製宝塔(七代家継)↓石製宝塔(九代家重・十二代家慶・十四代家茂)と変化する。埋葬施設は、石室内に据えた輿を槨とし棺に桶を用いた秀忠墓を除いて、

家宣墓以降、石室(御鞘石垣)石槨内に置かれた銅棺と木棺(御内箱)からなる立方体形多重棺に統一される。十八世紀前半に造営された家宣墓、家継墓、熙子(家宣正室)墓では、石室上面を漆喰で固めるという共通性が認められる。また、家重以降、家慶、家茂の3代の將軍墓は、いずれも石室と石槨の隙間に経石が納められている。

歴代の將軍は、衣冠束帯姿で埋葬され、若干八歳での世を去った七代家継の墓を除いて、太刀をはじめとする豊富な副葬品が納められている。副葬品に時期的な変化は認められない。

將軍の正室や側室の墓標は、秀忠正室達子墓が宝篋印塔である以外、將軍墓に準じて、銅製ないし、石製の宝塔が、また埋葬施設には石室石槨木棺が、それぞれ採用されている。將軍の子息女墓については、埋葬施設が正室・側室墓に共通する一方、將軍やその正室・側室墓に比べ副葬品は乏しく、墓標も宝塔ではなく宝篋印塔である。

増上寺徳川將軍家の墓のなかで、二代將軍秀忠の正室達姫のみが火葬されていた。土葬された遺体は、明治十年になって宮内省による埋葬が執り行われた静寛院宮(十四代將軍家茂正室)が寝葬である以外、全て座葬(蹲

踞・胡座・正座)である。

寛永寺凌雲院の徳川御三卿清水家の墓所は、発掘調査以前に改葬が行われていたため、墓標や副葬品に関する情報を大きく欠いているが、当主ならびに正室墓には石室石槨木棺が、また子女墓には石槨木棺が用いられており、將軍家に準じた形で墓が営まれていたことが判る。

【大名墓(一次葬)】(第2表)

墓標の形式は、各大名毎に選択がなされており、ある一つの大名家をとっても、当主、室、子息女など身分により形式に差がみられる場合が多い。

当主や室の墓では、埋葬施設に、石室ないし石槨が採用される事例が多いが、池田忠継墓や上杉治憲墓のように石を用いず木槨とする例や、南部重直墓のように、土境内に直接蔵骨器を置く例なども確認される。

発掘調査された大名墓のうち、火葬骨が発見されたのは、明暦元年(一六五五)没の津軽信義墓、寛文四年(一六六四)没の南部重直墓、元禄八年(一六九五)没の松平直矩墓のみである。これらはいずれも十七世紀後半に属しており、時期的な特徴として捉えられる可能性がある。そのほか年代を反映した葬法としては、石室内駕籠槨や桶棺などが挙げられる。石室内に駕籠槨を置く例は、これまでのところ、池田忠雄墓、伊達政宗墓、伊達忠宗

墓に限られる上、二代將軍秀忠墓の石室内輿槨との類似性も高いことから、十七世紀中頃に特徴的な葬制とみなすことができよう。桶棺も徳川秀忠墓をはじめ、池田忠継墓、伊達政宗墓、伊達忠宗墓など、十七世紀前葉から中葉の時期に限られる。甕棺を用いた土葬では、これまでのところ、元禄十二年(一六九九)に死亡した、徳島藩五代藩主の三男蜂須賀老之丞の事例が最も古いが、主として十八世紀以降の葬法と見ることができそうである。

副葬品が、被葬者の社会的地位に左右されることは言うまでもないが、同程度の家格の大名であっても、大名毎の差が大きい。複数の藩主墓が調査された、仙台藩主伊達家や長岡藩主牧野家の事例では、各々、歴代藩主の副葬品や死装束に一定の共通性がみられる。先例に倣うことが求められたのであろう。

【大名墓(二次葬)】(第3表)

明治初年までに改葬ないし分骨した遺体を再葬した墓で、発掘調査例が十件ほどある。一次葬同様、火葬は十七世紀代に多い。

元和元年(一六一五)に京都で没した上野館林藩二代藩主柳原康勝を葬った館林市善導寺の墓からは、火葬された下顎骨と歯のみが納められた柿右衛門様式の有蓋色

第3表(1) 大名家の本墓墓(二次墓)

被 葬 者	墓の所在地	被葬者の身分・社会的地位	死亡年月日	死亡した場所	墓 標	埋 葬 施 設
榊原 康 政	群馬県館林市善導寺	上野館林藩(10万石)初代藩主(老中)	慶長11年(1605)5月14日	館林	宝篋印塔	上墳
榊原 康 勝	群馬県館林市善導寺	上野館林藩(10万石)2代藩主	元和元年(1615)5月27日	京都	五輪塔	蔵骨器(柿石衛門様式有蓋小壺)
津 軽 信 義	青森県弘前市報恩寺	陸奥弘前藩(5万石)3代藩主	明暦元年(1655)11月25日	江戸 ⁱ	五輪塔	木柵落蓋列板式石棺蔵骨器
長 寿 院	東京都港区済海寺	越後長岡藩(7.4万石)2代藩主忠成生母	寛文4年(1664)閏5月10日	江戸 ⁱ	宝篋印塔	石柵蔵骨器
徳 川 綱 重	東京都港区芝増上寺	3代将軍家光第3子、6代将軍家宣父	延宝6年(1678)9月14日		墳丘	石室木棺(石灰充填)
厚 姫	東京都港区済海寺	越後長岡藩(7.4万石)4代藩主正室	享保17年(1732)2月27日	江戸 ⁱ	宝篋印塔	石柵龕蔵骨器
牧野忠精・満勢姫	東京都港区済海寺	越後長岡藩(7.4万石)9代藩主(老中)・正室	天保2年(1831)・天保4年(1833)	江戸 ⁱ ・江戸 ^j	宝篋印塔	蓋石蔵骨器
牧野忠雅・逸姫	東京都港区済海寺	越後長岡藩(7.4万石)10代藩主(老中)・正室	安政5年(1858)・明治6年(1880)	江戸 ⁱ ・東京	宝篋印塔	蓋石蔵骨器
牧野忠恭・莊姫	東京都港区済海寺	越後長岡藩(7.4万石)11代藩主(老中)・正室	明治11年(1878)・慶應3年(1867)	長岡・江戸 ⁱ	宝篋印塔	蓋石蔵骨器
盛 姫(鍋島国子)	東京都港区元麻布	肥前佐賀藩(23.12万石)10代藩主直正正室	弘化4年(1847)2月	江戸 ⁱ	円墳+自然石墓標	石柵木・青銅・木三重木棺

第3表(2) 大名家の本墓墓(二次墓)

被 葬 者	遺体等の状況	副 葬 品	備 考	文 献
榊原 康 政	火葬	なし	33回忌に墓石造立、100回忌に墓石修復	岡屋ほか1993
榊原 康 勝	火葬	なし	遺骨は下顎骨と歯のみ、100回忌に墓石修復	岡屋ほか1993
津 軽 信 義	火葬	なし	蔵骨器は信楽焼腰白三耳壺、文化8年(1811)五輪塔修復	陸奥史談会1954
長 寿 院	上葬再葬	カワラケ3 染付蓋物1		鈴木編1986
徳 川 綱 重	上葬再葬	金梨子地斐丸紋入り鞘の膳太刀1 無文巡丸柄の石帯1	宝永元年(1704)、傳通院より改葬、円墳(高さ約3m・径約10m)	鈴木・久島・山辺1967
厚 姫	火葬	合子1 紅皿2 京焼人形1 銀製小箱1 銅製小箱1 銀製煙管1 硯1 数珠玉7 ブラシ他	石製墓誌・銅板墓誌出土	鈴木編1986
牧野忠精・満勢姫	上葬再葬	眼鏡用円形ガラス2	銅板墓誌出土	鈴木編1986
牧野忠雅・逸姫	上葬再葬	なし	銅板墓誌出土	鈴木編1986
牧野忠恭・莊姫	上葬再合葬	なし	前に済海寺に埋葬された正室の墓に遺骨の一部を再合葬?	鈴木編1986
盛 姫(鍋島国子)	座葬再葬	鬘1 六角柱状製品2 木箱(「織上血脈」等墨書)1	明治5年(1872)増上寺常照院から改葬	高山・幸田2000

絵磁器小壺が発見されている（岡谷ほか一九九三）。蔵骨器に用いられた小壺は、一六五〇年代から七〇年代に生産されたものであり、百回忌にあたる正徳四年（一七一四）、五輪塔を建立した際に改葬された可能性がある。

明治五年（一八七二）、増上寺常照院から元麻布へ改葬された、肥前佐賀藩十代藩主鍋島直正室盛姫（国子）の棺は、銅棺と木棺からなる多重棺であった（高山・牟田二〇〇〇）。このような棺は、寝棺と座棺の違いはあるものの、江戸時代には増上寺の徳川將軍墓のみに認められる型式である。一方、寝棺という点では、明治十年（一八七七）宮内省による埋葬が執り行われた静寛院宮（十四代將軍家茂正室）の棺と共通しており、神葬祭に則った葬法と思われる。明治維新後、徳川家に替わって権力の中枢にあった旧有力大名家が、自らの神葬祭のなかに、部分的にせよ、將軍家の葬法を取り込んでいる点は注目される。

三 弘前藩主津輕家墓所における本葬と分霊

『津輕史事典』（弘前大学国史研究会編一九七七）によれば、弘前藩主津輕家の墓所は、江戸では、上野の津梁院をはじめ、常福寺・西福寺（浅草）、祥雲寺・東江

寺（渋谷）、青源寺（青山）、弘福寺（牛嶋）、宗參寺・竜門寺（牛込）、養源寺（駒込）、大円寺（芝）、養寿院・凌雲院（上野）、総泉寺・法花寺（不明）の以上十五カ所、国元では、革秀寺・長勝寺・報恩寺をはじめ、貞昌寺・藤先寺・耕春院（宗徳寺）・鳳松院・盛雲院・隣松寺・梅林寺・円明寺・法立寺・本行寺・海蔵寺（弘前）、保福寺（黒石）、高照神社・百沢寺（岩木町）の以上十七ヶ所に分かれていた。

津輕家の当主ならびにその正室の墓に限っても、江戸上野の津梁院と浅草の常福寺、国元の革秀寺、長勝寺、報恩寺、高照神社と多数の墓所が存在する。参勤交代の制度が確立する前に京で没した初代為信を除き、二代信枚以降、歴代藩主は、江戸、弘前のいずれかに本葬墓を持ち、残る片方の地に分霊墓を有する。また、四代から六代藩主を除いて、高野山の遍照尊院にも分霊墓が造られる（第4・5表）。藩主の正室については、初代と二代は弘前の長勝寺に、妻子の江戸在住が確立した三代以降は江戸上野の津梁院に、それぞれ本葬墓があるのみで、分霊墓は確認できない（第6表）。

ここでは、津輕家の当主とその正室の墓について、分霊墓を中心にその実態を明らかにするとともに、墓域毎に、その形成過程と構成原理を論じる。

第4表 弘前藩主津軽家の本葬墓(藩主)

藩主	俗名	法名	死亡年月日	死亡地	享年	死亡時の官位	本葬地	本葬地の墓標
初代	津軽為信	瑞祥院殿大室梁棟大居士	慶長12年(1607)12月5日	京都	58歳	従五位下	弘前 曹洞宗津軽山草秀寺	霊屋内宝篋印塔(文化年間大修理)
2代	津軽信枚	津梁院殿権大僧都寛海	寛永8年(1631)3月18日	江戸	46歳	従五位下越中守	江戸 天台宗清滝山常福寺 江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔(天和元年に津梁院へ移動) 五輪塔
3代	津軽信義	桂光院殿岑峯宗瑞大居士	明暦元年(1655)11月25日	江戸	37歳	従五位下土佐守	江戸 天台宗東叡山津梁院 弘前 天台宗一輪山報恩寺	五輪塔(現在、世田谷区妙壽寺へ) 五輪塔
4代	津軽信政	妙心院殿泰潤眞覚大居士	宝永7年(1710)10月18日	弘前	65歳	従五位下越中守	高岡霊社(現岩木町高照神社)	権現造風社殿(宝永7年頃造と伝)
5代	津軽信寿	玄主院殿性定徹心大居士	延享3年(1746)1月19日	江戸	78歳	隠居(従五位下土佐守)	江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔?(現在所在不明)
6代	津軽信著	顯休院殿眞道妙因大居士	延享元年(1744)5月25日	弘前	26歳	従五位下出羽守	弘前 曹洞宗太平山長勝寺	霊屋(慶安寺)内無縫塔(宝永3年建立)
7代	津軽信寧	戒香院殿梅溪常薫大居士	天明4年(1784)閏1月2日	江戸	46歳	従五位下越中守	江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔?(現在所在不明)
8代	津軽信明	禮孝院殿眞境普照大居士	寛政3年(1791)6月21日	江戸	30歳	従五位下土佐守	江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔?(現在所在不明)
9代	津軽寧親	上仙院殿権大僧都桃翁舜詢	天保4年(1833)6月14日	江戸	69歳	隠居(従四位下前侍従)	江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔?(現在所在不明)
10代	津軽信順	寛慶院殿深達了義大居士	文久2年(1862)10月14日	江戸	63歳	隠居(従四位下前侍従)	江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔?(現在所在不明)
11代	津軽順承	政徳院殿修道幼光大居士	慶應元年(1865)2月5日	江戸	66歳	隠居(従四位下前侍従)	江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔?(現在所在不明)
12代	津軽承昭	寛徳院殿承天有昭大居士	大正5年(1916)7月19日	東京	77歳	従一位勳一等伯爵	東京 谷中墓地	

第5表 弘前藩主津軽家の分霊墓(藩主)

藩主	俗名	法名	分霊地	分霊地の墓標	分霊地の埋葬施設・出土品等	備考
初代	津軽為信	瑞祥院殿大室梁棟大居士	紀州 真言宗高野山遍照尊院 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(砂岩) 宝篋印塔	不明 不明	21回忌に五輪塔造立 元和年間造立 現在行方不明
2代	津軽信枚	高源院殿沢傳次壽大居士 津梁院殿権大僧都寛海	弘前 曹洞宗太平山長勝寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(砂岩) 五輪塔(砂岩)	霊屋(碧巖台)内無縫塔(寛永8年建立) 不明	霊屋内に彩色木製五輪塔と唐津壺 唐津三耳壺に遺髪?
3代	津軽信義	桂光院殿岑峯宗瑞大居士	弘前 曹洞宗太平山長勝寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(砂岩) 五輪塔(砂岩)	霊屋(白雲台)内無縫塔 不明	霊屋内に彩色木製五輪塔 27回忌に五輪塔造立
4代	津軽信政	妙心院殿泰潤眞覚大居士	弘前 天台宗一輪山報恩寺 江戸 天台宗東叡山津梁院	五輪塔 五輪塔(現在、文京区南谷寺へ)	石室石榭木棺(抹香・御簪箱) 未調査	古川神道方式による葬儀
5代	津軽信寿	玄主院殿性定徹心大居士	弘前 天台宗一輪山報恩寺	五輪塔(昭和29年、長勝寺へ)	木柩三重木棺(銅製墓誌・膊帯)	他に寛永4年の逆修五輪塔あり
6代	津軽信著	霊雄院殿震中無等大居士 顯休院殿眞道妙因大居士	江戸 天台宗東叡山津梁院 弘前 天台宗一輪山報恩寺	五輪塔?(現在所在不明) 五輪塔	未調査 蓋石木棺(遺物なし)	
7代	津軽信寧	戒香院殿梅溪常薫大居士	弘前 天台宗一輪山報恩寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(昭和29年、長勝寺へ) 五輪塔(花崗岩)	組合式石棺(銅製位牌・木箱) 不明	
8代	津軽信明	禮孝院殿眞境普照大居士	弘前 天台宗一輪山報恩寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(昭和29年、長勝寺へ) 五輪塔(花崗岩)	組合式石棺(銅製位牌・木箱) 遺髪を納めた甕	
9代	津軽寧親	上仙院殿権大僧都桃翁舜詢	弘前 天台宗一輪山報恩寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(昭和29年、長勝寺へ) 五輪塔(花崗岩)	刳坂式石棺(銅製位牌・歯3本) 不明	1周忌に五輪塔造立
10代	津軽信順	寛慶院殿深達了義大居士	弘前 天台宗一輪山報恩寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(昭和29年、長勝寺へ) 五輪塔(花崗岩)	刳坂式石棺(銅製位牌) 不明	1周忌に五輪塔造立
11代	津軽順承	政徳院殿修道幼光大居士	弘前 天台宗一輪山報恩寺 紀州 真言宗高野山遍照尊院	五輪塔(昭和29年、長勝寺へ) 五輪塔(花崗岩)	刳坂式石棺(銅製位牌) 不明	
12代	津軽承昭	寛徳院殿承天有昭大居士	東京 天台宗東叡山津梁院	未調査	未調査	正室信姫(尹子)の墓石とならぶ

【長勝寺】 青森県弘前市西茂森町一丁目

① 寺域の成立と霊屋の造営

曹洞宗太平山長勝寺は、弘前城の西南方向にのびる台地のはずれ、土手と空濠とで仕切られた城の外郭（長勝寺構）の最奥部に位置する。弘前城築城の翌年にあたる慶長十五年（一六一〇）から元和元年（一六一五）にかけ、長勝寺構には、長勝寺をはじめとする三十四の曹洞宗寺院が集められ、大規模な寺院街が形成された。延宝八年（一六八〇）に編まれた「長勝寺並寺院開山世代調」(長勝寺蔵)によれば、長勝寺は、享祿元年（一五二八）、津軽家の祖とされる大浦光信(法号…巧樹院殿長勝隆栄)

の菩提を弔うため、光信の居館のあった種里(西津軽郡鯉ヶ沢町)に、光信の子盛信によって創建されたと伝えられる。その後、大浦氏(津軽氏)の居館が大浦城(中津軽郡岩木町賀田)、堀越城(弘前市堀越)、高岡(弘前)城と移動すると共に、長勝寺も移転を重ねている。初代弘前藩主為信は、慶長十二年(一六〇七)、京で没し、後に弘前城が築かれる高岡とは岩木川を隔てた対岸に位置する曹洞宗津軽山革秀寺に葬られた。現在、長勝寺には、本堂の西側に、為信の厨子を納めた御影堂(重要文化財)と呼ばれる建物がある。御影堂の建造年代は必ずしも明確ではないが、為信の死から3年後に始まる長勝

第6表 弘前藩主津軽家の本系圖 (藩主室)

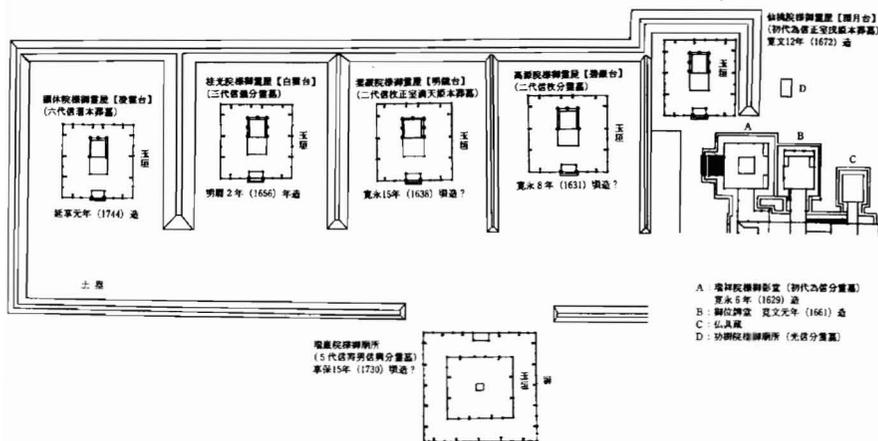
俗名	法名	死年月日	死地	享年	社会的地位	本葬地	本葬地の本屋	備考
皮部	仙徳院殿明庵貞心大姉	寛永5年(1628)4月29日	弘前	40	初代藩主津軽為信正室	弘前 曹洞宗太平山長勝寺	雲岩(深月台)内無縫塔	雲岩内に彩色木製五輪塔
満大	雲岩院殿社月采蓮大姉	寛永15年(1638)3月22日	弘前	49	2代藩主津軽信政正室	弘前 曹洞宗太平山長勝寺	雲原(明鏡台)内無縫塔	雲原内に彩色木製五輪塔等と骨箱(宇)
富宇	慶祥院殿之彌寿光大姉	貞享2年(1685)4月27日	江戸	62歳	3代藩主津軽信光正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
不申	源松院殿光岳妙可大姉	寛文13年(1723)5月29日	江戸	29歳	4代藩主津軽信政正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
國	法雲院殿榮房物安大姉	享保14年(1729)7月2日	江戸	57歳	5代藩主津軽信房正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
道	浄心院殿貞定妙空大姉	宝暦4年(1754)7月7日	江戸	40	6代藩主津軽信昌正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
綾	貞徳院殿清孝榮光大法尼	文化2年(1805)3月17日	江戸	66歳	7代藩主津軽信明正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
片佐	孫地院殿貞月御大法尼	天保8年(1839)6月5日	江戸	72歳	8代藩主津軽信明正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔	
綿	薫心院殿貞徳徳馨大姉	天保12年(1843)1月17日	江戸	76歳	9代藩主津軽尊親正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
深	縁理院殿心要本明大姉	文政4年(1820)12月16日	江戸	40	10代藩主津軽承昭正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
金(鉄)	仙徳院殿尊慈妙空大姉	嘉永4年(1851)9月14日	江戸	43歳	10代藩主津軽信濃正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
宗	彰仁院殿心定慧明大姉	嘉永元年(1848)6月11日	江戸	38歳	11代藩主津軽承昭正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
常	明光院殿明可吉善母大姉	文久元年(1861)7月3日	江戸	23歳	12代藩主津軽承昭正室	江戸 大宮宗東觀山律宗院	五輪塔(現在所在不明)	
七	貞仁院殿明鏡丹稚大姉	明治33年(1900)6月6日	東京	53歳	12代藩主津軽承昭正室	東京 谷戸丸庭地	五輪塔(現在所在不明)	11代藩主勲成女、承昭正室(水塔)

寺構への曹洞宗寺院集中化政策において、長勝寺への藩祖為信の分霊は、祖先崇拜と君臣秩序の再確認の上から、必要不可欠な措置であったと考えられる。

長勝寺には、津軽家の墓所として、現在5棟の霊屋(重要文化財)が残されている。5棟の霊屋のうち、実際に遺体が埋葬されていると考えられる本葬墓は、環月台(初代為信室成姫墓)、明鏡台(二代信枚室満大姫墓)、凌雲台(六代信著墓)の3基で、残る碧巖台(二代信枚墓)と白雲台(三代信義墓)は分霊墓である。管見によれば、江戸時代の長勝寺の境内を描いた絵図面としては、「長勝寺境内之図」(弘前図書館蔵)と「長勝寺之図」(宮川慎一郎氏蔵)がある。後者は文政八年(一八二五)の年号を有する。前者(第一図)の製作年代は不明であるが、両図面に描かれた位牌堂と初代為信の御影堂の位置関係の違いから、御影堂が大改造された文化二年(一八〇五)以前に描かれたものと推定できる。いずれの絵図にも現存する五棟の霊屋に加えて五代藩主信寿男信興の墓所が描かれている。後述するように、信興は享保十五年(一七三〇)、江戸で死亡し、上野の津梁院に葬られていることから、絵図にある墓は分霊墓である。この分霊墓に霊屋が存在したか否かについては明確でないが、「長勝寺境内之図」において、信興の墓所と他の霊屋との表現

方法は明らかに異なっており、少なくとも十八世紀末頃には霊屋は存在していない可能性が高い(第一図参照)。

また、『弘前藩庁日記(国日記)』には、貞享三年(一六八六)、長勝寺に三代藩主信義室富宇姫(慶林院殿)の御霊屋が建立されたことを示す記述があるが、現状では勿論、「長勝寺境内之図」でもその存在を確認することができない(註1)。もし、先例、すなわち碧巖台・明鏡台に倣って慶林院殿の霊屋が造られたなら、三代藩主信義の霊屋(白雲台)に向かって左側に位置していたことになるが、現在その場所には、六代藩主信著の霊屋である凌雲台が存在する。慶林院殿は上野の津梁院に本葬されており、長勝寺に造られたとされる霊屋は分霊墓ということになるが、津軽家の歴代藩主の正室のなかで他に分霊墓をもつ例はみあたらない。長勝寺にある正室の墓、すなわち環月台と明鏡台はいずれも本葬墓であり、それらと同一視することはできないのである。また、『国日記』には、度々霊屋の修理記録が残されているが、慶林院殿の霊屋に関しては、建立の開始のみが記載され、修復の記録は一切見当たらない。これらのことから、慶林院殿に関しては、当初長勝寺に分霊する計画があったが、最終的に霊屋は造られなかったものと思われる。同様に『国日記』には、天明四年(一七八四)江戸で没し



第1図 18世紀後半の弘前長勝寺津軽家墓所
 (「長勝寺境内之図」(弘前市立図書館蔵)にもとづき関根作図)

た七代藩主信寧の霊屋(分霊墓)を長勝寺に造る計画が記されているが、弘前藩は天明の飢饉のまっただなかにあり、実現しなかったものと推察される。

以上、長勝寺の霊屋(御影堂を含む)は、初代から三代藩主までの分霊墓と、国元で死亡した歴代藩主・正室のうち、神式で葬儀が執り行われた四代藩主信政を除く三名の本葬墓に限られることになる。藩政の基礎を築いた初代から三代藩主が分霊された霊屋は、亡き藩主の菩提を弔うという意味以上に、津軽家を一つに束ね、藩全体を精神面で鎮護する役割が課せられていたと推察される。

②長勝寺津軽家霊屋内に納められたもの

霊屋の内部に遺されたものに関しては、昭和五十七年度に弘前市立博物館が行った市内寺院の墓確認調査の成果報告書(『弘前の墓』)に、石製の無縫塔が報告されたのみで、これまで公表されたことはなかった。『国日記』には、寛文十一年(一六七二)八月十九日に、環月台・碧巖台・明鏡台の石塔が京都から到着したとの記述がみられることから、無縫塔は当初から霊屋内に墓標として存在していたのではなく、環月台の建て直しを中心とした寛文年間の長勝寺津軽家霊屋の大修理のなかで新たに付け加わったことが明らかである。では、建立当初、霊

屋のなかには何が納められていたのであろうか。平成十二年から始まった長勝寺津軽家霊屋の保存修理工事に伴い、霊屋内部に納められていたものが長勝寺位牌堂へ仮安置された折、筆者が確認したものは次の通りである(第2図)。

環月台 彩色木製五輪塔・柿経入りの曲物(享保十二年・百回忌)

碧巖台 彩色木製五輪塔・遺髪入りの唐津焼壺

明鏡台 彩色木製五輪塔・骨箱

白雲台 彩色木製五輪塔・修理札(嘉永四年)

凌雲台 胞衣?

これらの遺品のうち、後年霊屋に納められたことが明らかかな物を除くと、当初から存在した可能性の高いものとして、彩色木製五輪塔、遺髪入りの唐津焼壺、骨箱、胞衣?が残る。

凌雲台以外の4棟の霊屋に納められていた木製五輪塔のうち、白雲台をものを除く三基は、大きさにこそ違いはあれ、形式・彩色・墨書に一定の共通性が認められる。すなわち、これらの木製五輪塔は、空輪を緑、風輪を茶または白、火輪を赤、水輪を青に彩色され、その上から四面に「如来舍利」・「在宝塔中」・「逝者白骨」・「同入仏道」の各一字が墨書される。墨書は「如来のお骨は宝塔

の中にあり、死者の白骨も同じく仏道に入る」を意味し、木製五輪塔が分骨器の機能を有していることを示している。五輪塔の形式としては、最も新しい白雲台のものが、地輪の下の台にもう一段分骨器と思われる箱が接続している。白雲台の木製五輪塔は、塔身の墨書も他と異なり、「佛」(風輪)、「不」(火輪)、「凌」(水輪)、「火・程・水・爐」(地輪)の各文字が記されている。

奈良市西大寺奥院骨堂や福島県河東村八葉寺阿弥陀堂などでは、死者の霊魂を霊山に分けるために納められた小型の納骨木製五輪塔が知られているが、長勝寺津軽家霊屋にみられるような塔身が一メートル前後を測る大型の木製五輪塔は、類例を知らない。会津八葉寺の木製五輪塔は、奉納の風習が十六世紀末以前から近年までの長きにわたっている点に特色があるが、紀年名資料による限り、大部分が十七世紀代、それも前半期に集中している(岩崎監修一九七三)。長勝寺の霊屋のなかで唯一、凌雲台だけに木製五輪塔が存在しないのは、凌雲台が造られた十八世紀には既に、木製五輪塔の製作がほとんど行われない状況になっていたからであろう。

明鏡台の骨箱は、上蓋に「全身舍利」、身の側面に「逝者白骨」・「同入佛」・「如来」・「在宝塔」の墨書が認められ、木製五輪塔との共通性が窺える。現在、明鏡台の骨



1. 彩色木製五輪塔【環月台】
(高83cm. 上から緑・白・赤・青・黄)



2. 彩色木製五輪塔【碧巖台】
(高78cm. 上から緑・茶・赤・青・金)



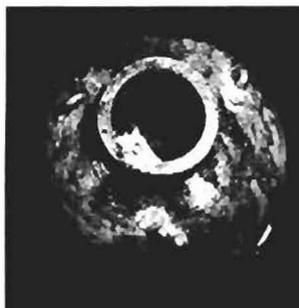
3. 彩色木製五輪塔【明鏡台】
(高109.2cm. 上から緑・白・赤・青・無)



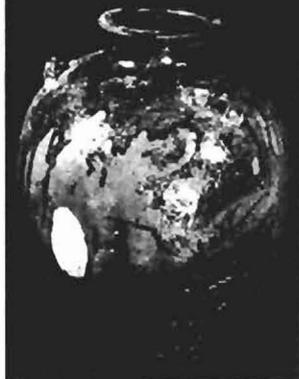
4. 彩色木製五輪塔【白雲台】
(高111.5cm. 上から緑・茶・赤・青・黄)



6. 舍利罏? (中は空)【明鏡台】
(側面に「逝者白骨・阿闍婆・如来・在寶塔」)



5. 初代為信正室の百回忌(1721年)に
納められた柿糰とその容器【環月台】



7. 唐津焼壺 (17c 第1四半期)【碧巖台】
(内部1/2近くまで多数の毛髪を確認)

第2図 長勝寺津輕家霊屋内に安置された品

箱の中身は空であるが、本来、遺骨あるいは遺骨の代わりとなる歯・爪・毛髪等が入っていたものと推測される。事実、碧巖台に遺されていた木箱には、多量の毛髪の入った、高さ約三三・三センチの唐津焼三耳壺が藁につつまれた状態で納められていた。この壺の体部には、焼成の際に熔着した、内面に同心円状のタタキ目を有する壺ないし甕の破片が残る。この三耳壺は、その形状や附着した破片にみられる同心円状のタタキ目などの特徴が佐賀県塩田町大草野窯跡出土資料（九州近世陶磁学会二〇〇〇）に類似し、十七世紀第一四半期の製品と推測される。年代的には二代藩主信枚の没した寛永八年（一六三一）とうまく整合することから、この三耳壺は、信枚の死の直後に、分霊のため霊屋に納められた可能性が高いと判断される。このほか、霊屋の修理記録から、環月台（『御用留日記』の元禄十四年四月二十日の項）や白雲台（『国日記』の文化元年七月十一日の項）にも「御骨箱」が存在していたことが判明する。おそらく本葬・分霊に関係なく、すなわち地下の埋葬施設の有無とは別に、地上の建造物である霊屋には、死者の亡骸を仏道に導く装置（分骨器）として、少なくとも木製五輪塔か骨箱のどちらか一方は必ず納められていたのであろう。

凌雲台に遺された袍衣？は、近年瀬戸・美濃地方で造

られた白磁の円筒形を呈する骨壺に移し替えられており、本来どのような状態で納められていたのか不明である。袍衣納めの実態は、近年、江戸遺跡を中心に考古学的手法により明らかに成りつつあるが、袍衣を墓所に納める行為はあまり一般的とは言えないようである。発掘調査例では、東京都港区瑞聖寺の仙台藩主伊達家墓所から、四代藩主綱村の継子で、貞享二年（一六八五）に五歳で没した扇千代のものと思われる袍衣桶が発見されている（松本一九九八・谷川一九九八）。民俗例では、「エナは保存しておいて、女の子なら嫁入りの時に持たせ、死んだ時には、棺の中に入れるという例」が報告されている（大藤一九六八）。今後、似たような事例が蓄積されるのを待たねばならぬが、遺骨（遺髪・遺爪）と胎盤を、それぞれ死と生の象徴とみなし、そこに輪廻転生の思想を見いだすこともできよう。

【津梁院】 東京都台東区上野桜木一丁目

①寺の創建と二代藩主信枚の墓

津梁院は、天台宗東叡山寛永寺三十六坊のひとつで、一九五三年まで寛永寺坂上にあつた。津梁院は、二代藩主信枚の法名に由来し、信枚の墓所として寛永年間に三代藩主信義により創建された。『弘前藩庁日記（江戸日記）』によれば、延宝八年（一六八〇）、津梁院に四代将

軍家綱の廟所が築かれることとなり、津梁院は林広院跡地へ移転している。津梁院の津輕家墓所の成立と変遷に關しては、既に『弘前藩庁日記』や「浅草常福寺日記」等をもとに篠村正雄氏が検討されており、江戸で死亡した二代藩主信枚は、はじめ浅草にある天台宗常福寺に埋葬され、天和元年（一六八一）五月に、四代藩主信政の意向を受けて津梁院へ五輪塔の移動を伴って改葬されたことが明らかとなっている（篠村一九九四・九五）。延宝八年（一六八〇）五月十二日付の『弘前藩庁日記（江戸日記）』には、「一、寛海様御骨無し二付、一丈程はらせ見候ても無之候事」とある。この記事から、信枚の死をうけて津梁院に造られた墓は分霊墓であり、遺体そのものは常福寺に埋葬されたこと、死後五十年が経過し、遺体を津梁院と常福寺のどちらに本葬したか思い出せない状態になっていたことが判る。既に篠村氏が指摘したように、翌天和元年（一六八一）五月になって常福寺の墓から掘り起こされた信枚の遺骨は、六月三十日、三代藩主信義の遺骨、四代藩主室ならびに六代藩主室の棺とともに津梁院の移転先にあらためて改葬された（註2）。

②江戸における津輕家の菩提寺としての津梁院

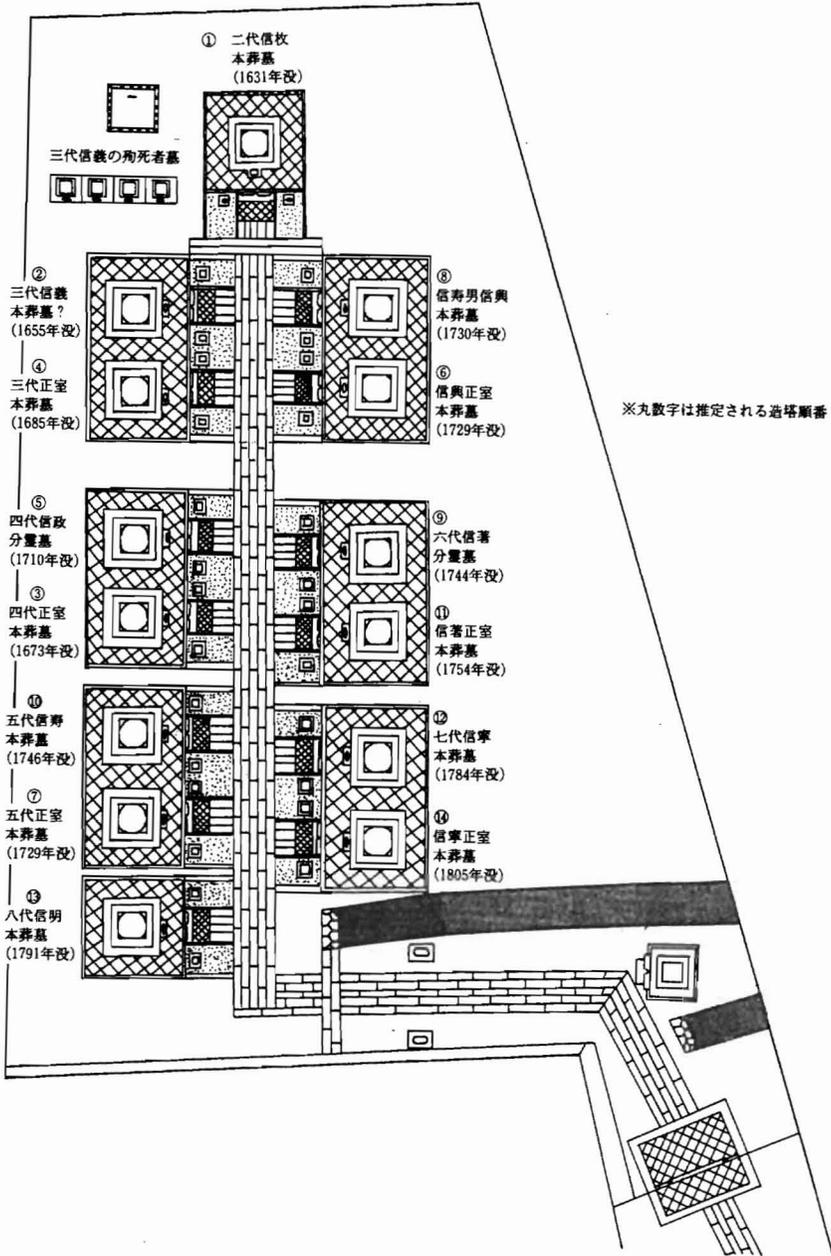
津梁院の移転を契機として、天和元年、移転先に二代信枚の遺骨を迎え、津輕家の墓所が整備されたことで、

常福寺に対する津梁院の優位性は決定的となった。

十九世紀前葉の津輕家墓所の様子を伝える「津梁院境内廟所図」（第3図）では、最も奥まったところに常福寺より改葬された信枚の遺骨を納めた本葬墓があり、その手前、墓道をはさんでその両側に、三代以降の藩主と正室の墓、および五代藩主信寿から家督を相続する前に没した信興とその正室の墓が、それぞれ並んで配置されている。これらの墓のなかで、国元で没した四代藩主信政と六代藩主信著の墓は、遺体を伴わない分霊墓である。

「津梁院境内廟所図」にある藩主・正室墓のうち、現在、津梁院の津輕家墓所に残っているのは、二代藩主信枚の五輪塔のみである。しかし、世田谷区北烏山の妙壽寺に移された三代藩主信義の五輪塔や、文京区本駒込の南谷寺に移された四代藩主信政の五輪塔からみて、「津梁院境内廟所図」に描かれた藩主・正室墓の墓標は、全て五輪塔であったと思われる。

江戸における菩提寺としての津輕家墓所の特徴は、本葬・分霊の区別なく、藩主と正室の墓を一つの組として、それらを代毎に整然と配置した点にあり、他の大名の江戸における墓所の在り方と共通する一方、国元における津輕家の墓所とは大きく異なる。



第3図 19世紀前葉の江戸津梁院津輕家墓所
 [「津梁院境内廟所図」(東奥義塾高等学校蔵)にもとづき関根作図]

【報恩寺】 青森県弘前市新寺町

①寺の創建と弘前藩の宗教政策

天台宗一輪山報恩寺は、弘前城の南方の要である南溜池の南側の台地上に立地し、城の防衛ラインである土淵川を眼下にのぞむ。報恩寺のある新寺町は、慶安三年（一六五〇）から寺町として整備が開始されている。報恩寺は、明暦二年（一六五六）、前年に江戸で没した三代藩主信義の菩提を弔うため、四代藩主信政により創建された。報恩寺には、かつて三代から十一代までの歴代藩主と、その子息の墓があったが、一九五四年、隣接する弘前高等学校の施設整備にともない、長勝寺へ改葬されることとなり、陸奥史談会による発掘調査が行われた。

江戸時代の墓所の様子を伝える絵図面類は知られていないため、改葬時に記録された墓の配置図を示す（第4図）。墓の入口の門をくぐると、正面に三代信義と四代信政の五輪塔が並んでおり、報恩寺が、信義の死を機に跡を継いだ信政によって創建されたことを象徴している。信義・信政の墓の北側には、五代から十一代までの歴代藩主と、十一代藩主順承の後嗣の承祐の計六基の五輪塔が、同じく南側には、十代信順と十二代承昭の子息女の墓3基（いずれも墓標は丘状頭角柱形）が存在した。

信義の代は、弘前藩でも、寛永十一年（一六三四）、

正保四年（一六四七）と藩政全体を揺るがすお家騒動が連続したが、信義の死後、信義の弟で幕府書院番の信英を後見として幼い四代藩主信政の相続が認められたことから判るように、信義の死に際して、弘前藩は未曾有の危機に直面していたことになる。明暦二年（一六五六）には信義の遺骨を迎えて報恩寺が創建されるとともに、新寺町の寺院群の北端に位置する大円寺に、津軽平定以来の戦没者を供養するための五重塔（重要文化財現最勝院五重塔）の建設が開始された。城下町の建設に際して、長勝寺構の中心長勝寺に初代為信を分霊した御影堂が必要とされたように、藩政全体を揺るがす危機に際して、建設中の宗教的エリア新寺構においても、支配の正統性と格式序列の再確認のための装置として、信義から始まる藩主の菩提寺（報恩寺）と、津軽平定以来の戦没者の供養を目的とする五重塔が新たに必要とされたと思われる。

②報恩寺津軽家墓所にみられる本葬と分霊

一九五四年に行われた発掘調査の結果、遺体の埋葬された本葬墓は、三代藩主信義墓と藩主の子息女墓四基に過ぎず、四代以下歴代藩主の墓は全て分霊墓であることが判明した。

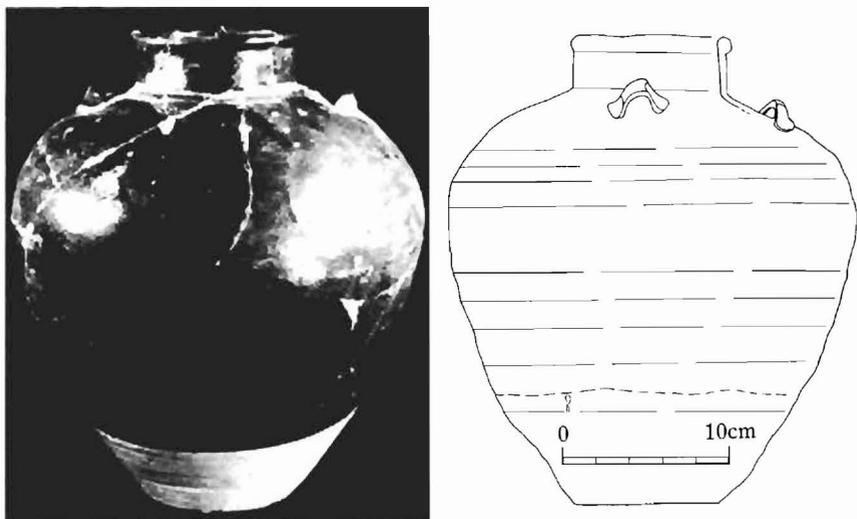
藩主墓のなかで唯一遺体の埋葬が確認された信義墓

は、ヒバ材で組んだ木槨のなかに刳り抜き式の石棺を据え、さらにそのなかに火葬骨の入った壺が入れられている。三代藩主信義の遺骨を報恩寺に移すことに関しては、国立史料館所蔵の『陸奥国弘前津軽家文書』のなかにある「浅草常福寺口上書」に「報恩寺起立之時も本祐弟子本好・本圭兩人宗瑞様御骨之御供仕罷下御国二越年仕」とあり、信義の死の翌年、明暦二年（一六五六）、報恩寺創建に際して、江戸浅草常福寺の僧が信義の遺骨を携えて来たことが記されている。既に津梁院のところで述べたように、天和元年（一六八一）に行われた津梁院津軽家墓所の移転に際しても、信義の遺骨が改葬されていることから、報恩寺が創建される明暦二年の段階で、信義の火葬骨は、報恩寺と津梁院の両方に分けられたとみるべきであろう。蔵骨器として使われた壺（第5図）は、「腰白茶壺」と呼ばれる信楽焼の三耳壺で、一般には葉茶壺として使われるケースが多い。信楽では江戸時代を通じて「腰白茶壺」が生産されていた可能性が高いとおもわれるが、従来は、十八世紀以降に比定されることが多かった。筆者は以前、仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点の1号溝から出土した「腰白茶壺」に関して、共伴した陶磁器や遺構自体の年代観から、十七世紀中葉以前に遡る可能性を指摘した（東北大学埋蔵文化財調査研

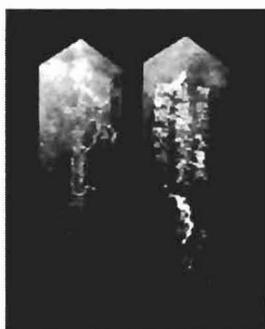
究センター二〇〇〇）。信義の蔵骨器として用いられた「腰白茶壺」は、明暦二年以前に生産されたことが明確であり、信楽焼の年代を示す基準資料として重要である。藩主の子息女の墓は、全て土葬で、「兼平石」と呼ばれる岩木町平岩山産出の輝石安山岩を蓋石とした木槨のなかに、木棺を据えている。なかでも十一代藩主の嗣養子となりながら、安政二年（一八五五）、十八歳の若さで亡くなった承祐の墓は、墓壙が深く掘られている上、木炭の詰まった木槨の上を粘土や割石で密封していたため、遺体や副葬品の保存状態が極めて良好であった。

四代藩主信政の分霊墓は、石室内に石槨を築き、そのなかに抹香と御爾箱の入った木棺を据えている。

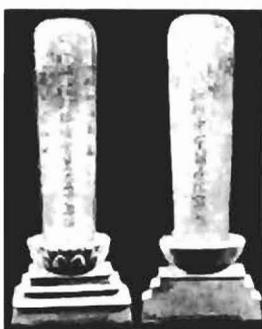
五代藩主信寿の分霊墓は、木槨のなかに三重の木棺を置き、そのなかに銅製の墓誌と臍帯を入れていた。七代から十一代までの藩主の分霊墓では、木槨内に置かれた石棺から中実の銅製位牌が発見された（第6図）。これらの墓では、銅製位牌に加え、石棺内から、歯（九代藩主寧親墓）や遺髪・義歯（十代藩主信順墓）などが見つかっているほか、臍の緒や爪等が入っていた可能性のある木の小箱も出土している（七代藩主信寧墓・八代藩主信明墓）。報恩寺や前に検討した長勝寺の事例から、地上に造られた霊屋であろうと地下に設けられた墓壙である



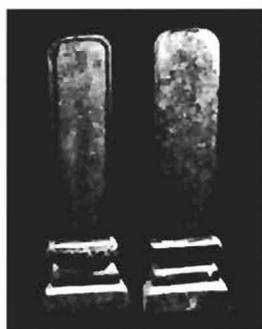
第5図 弘前市報恩寺津軽信義墓出土の信楽焼蔵骨器（17世紀中葉）



1. 五代藩主信寿墓(1746年没)



2. 七代藩主信寧墓(1784年没)



3. 八代藩主信明墓(1791年没)



4. 九代藩主寧親墓(1833年没)

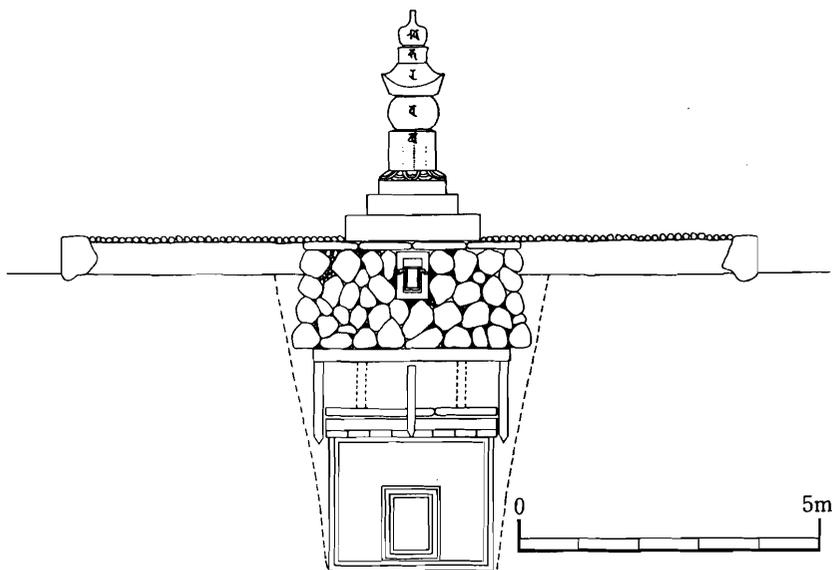


5. 十代藩主信順墓(1862年没)



6. 十一代藩主順承墓(1865年没)

第6図 弘前市報恩寺津軽家墓所出土の銅製墓誌・銅製位牌



第7図 弘前市報恩寺津軽承祐の本葬墓（1855年没）

〔『陸奥史談』第23輯掲載の図を改変〕

うと、分霊に際しては、なにがしか被葬者の体の一部が必要とされた可能性の高いことが判明する。なお、『国日記』によれば、延享元年（一七四四）弘前で亡くなった六代藩主信著は、長勝寺へ本葬されてまもなく報恩寺へ改葬されたとされるが、発掘調査の結果、遺体そのものは、移されていないことが明らかとなっている（註3）。

【高野山遍照尊院】 和歌山県伊都郡高野町

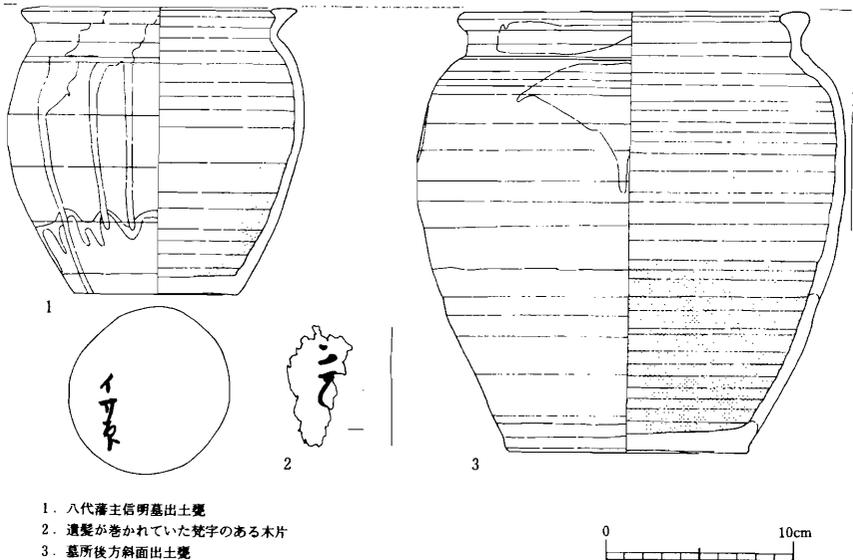
① 津軽家墓所の形成

遍照尊院は、真言密教の根本道場である高野山の南谷地区に位置する。寛永八年（一六三一）の「津軽公契約書」によれば、津軽家と遍照尊院との関係は、同年、三代藩主信義により、高野山における津軽家の墓所が、小田原谷の真如院から遍照尊院へ移されたことに始まる。同院の津軽家墓所には、四代、六代を除く歴代藩主をはじめ、初代藩主の正室戌姫（本葬地は長勝寺環月台）、二代藩主の妹伊喜姫（同じく弘前貞昌寺）、四代藩主信政の男為永（同じく弘前耕春院）、家老大道寺為久（同じく弘前宗徳寺）、家老大道寺繁清・妻伊与の供養塔ならびに二代藩主信枚の逆修塔などが存在する。四代藩主信政の葬儀は神式で行われたため、高野山に分霊されなかったと思われるが、五代信寿と六代信著の供養塔が見当たらない理由は不明である。なお、津軽家の供養塔・

逆修塔は全て五輪塔である。一九八六・八七年、石塔の改修工事に伴い、立正大学により墓所の発掘調査ならびに遍照尊院所蔵文書の調査が行われた（岡本・井上編一九八八）。調査報告書によれば、遍照尊院津軽家墓所では、被葬者の没後、一周忌、三・二十一・二十七回忌に五輪塔が建立されているが、少なくとも三回以上の修復を受けており、石塔の配置は原位置から大きく移動しているものが多い。報告書では、『奥院繪圖』（金剛峯寺蔵）に描かれた宝永四年（一七〇七）当時の墓所が復元され、初代・二代・三代の歴代藩主の供養塔が東西に、歴代藩主の正室をはじめとする人々の供養塔や二代藩主の逆修塔を南北に、全体としてはし字状に石塔が配置されていたことが確認された。藩主と正室の供養塔の配置がペアでない点や、七代藩主以降、正室の供養塔が造営されていない点などは、本葬墓が主体を占める江戸津梁院の墓所と大きく異なり、分霊墓の特色を示している。

② 遍照尊院の津軽家墓所にみられる分霊

遍照尊院津軽家墓所の発掘調査では、分霊のために石塔の下に埋納された、遺髪の入った陶器の中型甕が2点出土している（第8図）。このうち、寛政三年（一七九一）に死亡した八代藩主信明の供養塔の基壇内に置かれていた甕には、長さ二十センチメートル前後に切られた



1. 八代藩主信明墓出土甕
2. 遺髪が巻かれていた甕のある木片
3. 墓所後方斜面出土甕

第8図 高野山遍照尊院津軽家墓所から出土した遺髪入の甕

（実測図は発掘調査報告書（岡本・井上1988）による）

毛髪が、梵字「バン（大日如来）」の墨書のある木製品に巻かれた状態で遺存していた（註4）。甕の底には、「イサ印」と読める墨書が認められた。長勝寺霊屋がそうであったように、高野山への分霊にも、遺骨・遺髪など死者の遺体の一部が必要であったと思われる。現存する五輪塔は全て、水輪・地輪・基礎（請花・反花）のどこかが必ず中空となっており、遺体の一部を納める空間が確保されている。それにもかかわらず遺髪等の検出された墓が2基に止まったのは、前述のように、遍照尊院津軽家墓所の石塔の多くが後年移動しており、移動の際に失われたからであろう。事実、毛髪の入った別の甕は、原位置から移動しており、墓地内からは、遺髪の入った甕と同様の陶器片も出土している。

四 近世大名墓の変化と画期

これまで行ってきた、徳川將軍家や大名家の本葬墓、弘前藩主津軽家の本葬墓・分霊墓の検討を踏まえ、近世大名墓の編年を試みる。

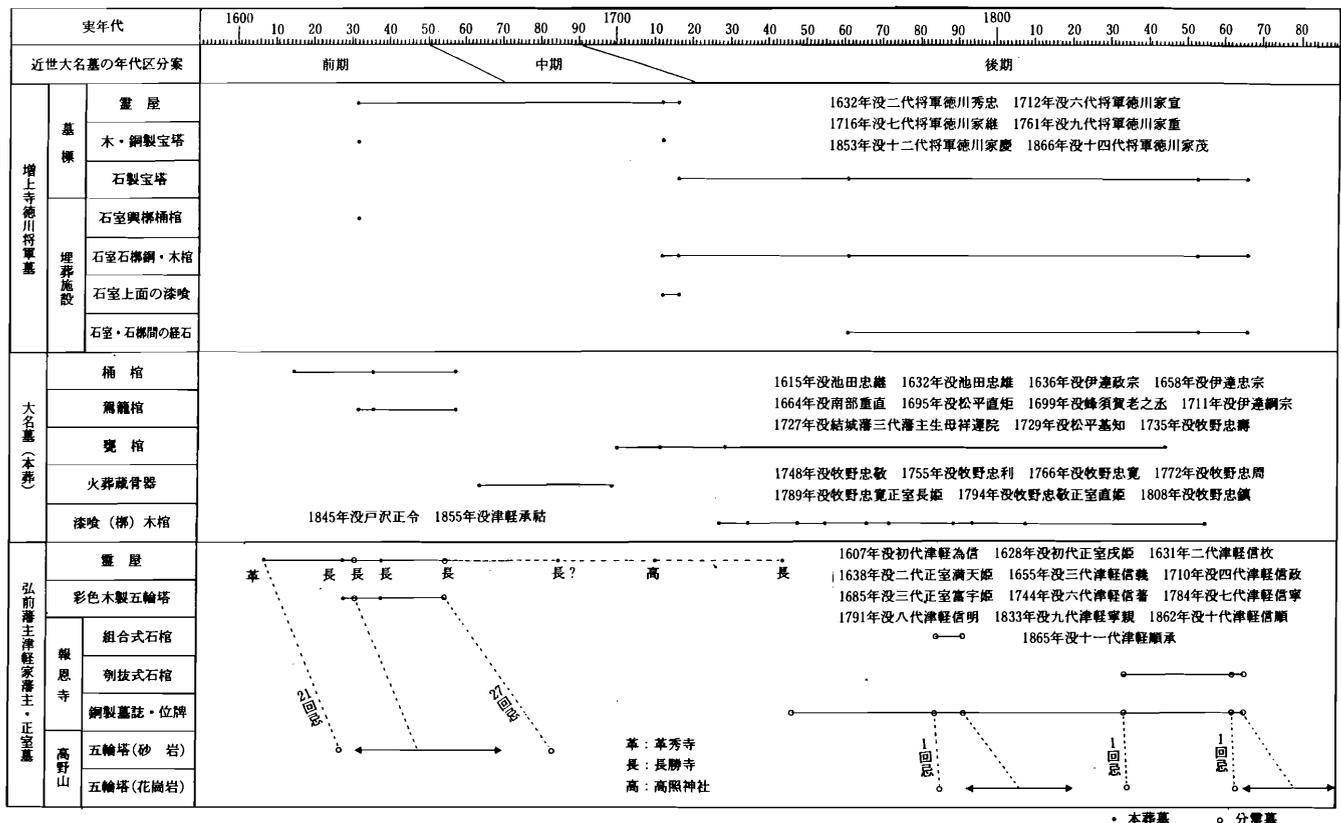
墓標、葬法、埋葬施設の在り方などから、近世の大名墓は、前期（十七世紀前半）、中期（十七世紀後半から十八世紀初頭）、後期（十八世紀前葉から十九世紀中葉）

の三時期に区分することが可能である（第9図）。

前期の大名墓は、土葬（座葬）が多く、棺に桶・駕籠・輿等が用いられる点に特徴がある。副葬品では、徳川秀忠墓における鉄砲や、伊達政宗・忠宗墓における具足・鎧櫃などに、「武人」としての性格が反映される一方、徳川秀忠墓におけるオランダ産アルパレロ形陶器水指や楽焼（二代常慶）の香炉、池田忠雄墓における志野天目茶碗など第一級の茶道具からは、「茶人」としての性格を読みとることができ。

前期は、靈廟建築が最も発達した段階でもある。長勝寺の津軽家霊屋は、前期のもの四棟と中期のもの一棟からなるが、前期に属する霊屋内には、大型の彩色木製五輪塔が納められていた。増上寺徳川將軍墓においても、寛永九年（一六三二）に亡くなった二代將軍秀忠の宝塔だけが木製であり、近世初期には、木製の墓標がかなりの割合を占めていた可能性がある。

中期の大名墓の発掘調査例は少なく、実態は良くわかっていないが、全体的には前期に比べ簡素な方向に向かったと考えられる。本葬墓では、火葬が流行し、豪華な金具をちりばめた駕籠や輿にかわって、陶磁器の蔵骨器や甕棺が石室（石槨）内に納められる。また、白河藩主松平家の事例が示すように、ある一つの名名家でも、必ず



第9図 近世大名墓の様式変化と時期区分

しも葬法が定まっておらず、多様な在り方を示す。また、増上寺徳川將軍墓では、中期に属する六代將軍家宣墓と七代將軍家継墓に限って、石室の上面を漆喰で固めていた。これは、後期大名墓における石室漆喰槨の原形とみることができよう。なお、副葬品に、武器や茶道具に替わって数珠などの仏具が目立ち始めるのも中期からである。

津軽家の場合、初代為信・二代信枚・三代信義の墓が前期に、四代信政の墓が中期に相当するが、それぞれ藩主の死後、革秀寺、津梁院、報恩寺、高照神社といった亡き藩主の霊を祀る施設が新設されている。五代信寿以降、後期に属する墓は、前期に始まる墓所に営まれており、新たに藩主の墓所が設けられることはない。経ヶ峯仙台藩主伊達家墓所や増上寺徳川將軍家墓所においても、霊屋が営まれるのは中期までで、後期には続かない。大名家の改易や御家騒動が頻発し、政治的基盤が必ずしも盤石とは言えない段階では、いずれの藩においても、藩主の死に始まる代替わりの際、極度に政治的な緊張が高まったと想像される。前期・中期の大名墓は、分霊墓は言うに及ばず、遺体を納めた本葬墓であっても、単なる埋葬施設という以上に、支配の正統性と格式序列を再確認し、藩内に政治的安定をもたらす装置（記念物）と

いう意味合いが強かったであろう。

後期には、各大名家毎に、埋葬様式が確立する。増上寺の徳川將軍家墓所では、霊屋が建造されなくなり、歴代將軍の墓標は石製の宝塔に、同じく埋葬施設は石室石槨内に置かれた、外棺銅製・内棺木製の箱形多重棺に統一される。済海寺長岡藩主牧野家墓所で調査された墓は、寛文四年（一六六四）に亡くなった二代藩主忠成生母長壽院の墓を除いて後期に属するが、歴代の藩主・室の本葬墓（一次葬墓）は全て、墓標は宝篋印塔に、埋葬施設は石室漆喰槨木棺に統一され、銅製の墓誌を伴っている。報恩寺の津軽家墓所においても、後期に属する六代藩主以降の分霊墓や十一代藩主の嗣養子である承祜の本葬墓からは銅製の墓誌や位牌が出土しており、済海寺長岡藩主牧野家墓所と共通性が認められる。

後期大名墓の副葬品には、中期以上に、数珠をはじめとする仏具が含まれるようになる。また、増上寺の徳川將軍墓では、九代將軍墓以降、石室と石槨の間に経石が納められるようになる。銅製位牌・数珠・経石といった仏教関連の副葬品は、後期大名墓が、死者の菩提を弔う施設としての性格を強めたことを物語っている。

五 結 語

万人が等しく避けて通れない「死」という出来事に対して、残された者達がとる葬送行為は、時により場所により多様で変化に富んでいる。本論で取り上げた近世大名墓の場合、十七世紀中頃と十七世紀末・十八世紀初頭に大きな画期が想定できた。

前期の大名墓は、藩主の霊を「祀る」ことに主眼が置かれている。政権基盤が必ずしも安定していない段階にあって、代替わりという政治的危機を乗り越え、自らの正統性を内外にアピールするため、新藩主は、歴代藩主の墓所を拡張整備する必要があった。時として政治的目的から分霊が行われることもあり、藩主は死してなお、統治に貢献することが期待されたのである。

中期の大名墓は、依然として藩主の霊を「祀る」という性格をとどめているが、前期に比べ薄葬化される。そうした変化の背景には、藩の財政的事情だけでなく、藩主のクリスマ性の低下があったものと推測される。

本論では、各家毎にはあるが、大名墓の様式が確立する段階、すなわち十八世紀前葉以降を後期と呼んだ。前期・中期の大名墓が藩主の霊を「祀る」ことに主眼を置いていたのに対して、後期の大名墓は、藩主の霊を「弔

う」ことに重点が置かれる。十八世紀には大名家の支配が安定期にはいり、藩主の死が藩の存亡に直結する危険性が薄らいだ結果、大名墓も質的变化を遂げたのである。

長勝寺や報恩寺の津軽家墓所が示すように、大名墓の多くは、外見上、本葬墓と分霊墓の区別が付きにくい。そのため、今回は、発掘調査が行われ、埋葬施設の在り方が判明している大名墓を中心に議論を進めた。したがって、取り上げた大名墓は全体のごく一部に止まらざるを得なかった。極めて断片的なデータからではあるが、近世大名墓の変遷を跡づけ、大名自身の質的变化という観点から説明を試みた。今後、全国に散らばる大名家の霊屋の集成や、高野山における全国の大名墓の基礎的調査を行い、大名家間の比較研究を進める必要がある。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々のお世話になった。末筆ではありますが、深く感謝申し上げます。

長勝寺（須藤祥二住職）、弘前市立図書館、宮川慎一郎（弘前市史編纂室）、藤沼邦彦（弘前大学）、篠村正雄、榎木真（新宿歴史博物館）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、似内啓邦（盛岡市教育委員会）、富岡直人（岡山理科大学）、奈良貴史、舩谷頭一（順不同・敬称略）

註

(1) 『国日記』によれば、貞享三年(一六八六)八月七日、信義の霊屋に倣って長勝寺に慶林院殿の霊屋を建立するようにとの申し渡し、寺社奉行と作事奉行に対してなされている。同年八月二十日には、慶林院殿の霊屋の石垣に用いる石が、石森山(弘前市常盤坂)から割り出され、九月二日には、霊屋建立に伴って普請場の掟が定められたとされる。

(2) 『江戸日記』の延宝九年(一六八一)六月三十日には、「寛海様、宗瑞様御骨、涼松院様御棺、浄心様御棺、寿昌院より津梁院御廟所土中奉納候」とある。寿昌院は、弘前の長勝寺の末寺で、おなじく長勝寺構にある曹洞宗頓川山寿昌院と考えられる。浄福寺から掘り出された信杖、津梁院の旧墓地から掘り出された信義、信政室、信著室の遺体や棺は、津梁院移転先の津軽家墓所に改葬されるまでの間、国元で保管されていた可能性がある。

(3) 報恩寺の信著の墓は、土壇に座棺をいれ、その上を四枚の兼平石で塞いだものであった(陸奥史談会一九五四)。墓は、藩主になる前に死亡した承祐の墓に比べても簡素な構造で、藩主の本葬墓とは考えにくい。実際、遺体の痕跡も確認されていないことから、遺体そのものは長勝寺から改葬されなかった可能性が高い。

(4) 八代藩主信明の五輪塔に造営年代は記されていないが、施主として「真壽院(七代藩主信寧室)」と「櫻池院(信明室)」の名が刻まれていることから、信明の一周忌にあたる一七

九二年から真壽院の亡くなった文化二年(一八〇五)の間
に造られたと推定される。

(引用・参考文献)

- 青森県教育委員会(一九七九)『青森県の近世社寺』
青森県教育委員会(一九九二)『青森県の近世社寺建築(Ⅱ)』
伊東信雄編(一九七九)『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』
伊東信雄編(一九八五)『感仙殿伊達忠宗・善応殿伊達綱宗の墓とその遺品』
その遺品』
岩崎敏夫(一九七三)『八葉寺木製五輪塔の研究』萬葉堂書店
上杉家(一九九六)『米沢藩主上杉家墓所治憲廟墓壇修復説明資料』
大藤ゆき(一九六八)『見やらい』岩崎美術社
岡本桂典・井上雅孝編(一九八八)『旧弘前藩主津軽家墓所石塔修復調査報告』遍照尊院
岡屋英治ほか(一九九三)『国指定史跡榊原康政の墓調査報告書』
館林市教育委員会
岡山市遺跡調査団(一九七八)『池田忠継廟地下遺構発掘調査概要』
加藤晋平ほか編(一九九六)『上野忍ヶ岡遺跡国立西洋美術館地点』
鎌木義昌ほか(一九六四)『池田忠雄墓所調査報告書』岡山市教育委員会
河越逸行(一九七五)『掘り出された江戸時代』丸善
河原芳嗣(一九九三)『探訪・江戸大名旗本の墓』毎日新聞社
九州近世陶磁学会(二〇〇〇)『九州陶磁の編年』
古泉弘(二〇〇一a)『墓の諸相』『図説江戸考古学研究事典』

- 一三六～一四二頁 柏書房
- 古泉弘(二〇〇一b)『埋葬形式』『図説江戸考古学研究事典』
一四二～一四五頁 柏書房
- 惟村忠志・竹内俊之編(一九九〇)『東叡山寛永寺護国院 都立上野高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書』都立学校遺跡調査会
- 篠村正雄(一九九四)『浅草常福寺口上書と御屋鋪え常福寺御由緒略覚』『市史ひろさき』第三号一三〇～一四二頁
- 篠村正雄(一九九五)『津梁院境内廟所図』『市史ひろさき』第四号 九〇～九九頁
- 篠村正雄(一九九七)『萬隆寺・妙壽寺・南谷寺と津軽藩主の墓石』『市史ひろさき』第6号 四四～五五頁
- 鈴木公雄編(一九八六)『長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』港区教育委員会
- 鈴木尚・矢島恭介・山辺知行編(一九六七)『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』東京大学出版会
- 高山優・牟田行秀(二〇〇〇)『鍋島家旧麻布墓所の改葬に伴う立会調査』『港区文化財調査集録』第五集 一～二二頁
- 谷川章雄(一九九一)『江戸の墓地の発掘』『甦る江戸』七九～一一頁 江戸遺跡研究会
- 谷川章雄(一九九六)『江戸の墓の埋葬施設と副葬品』『江戸時代の墓と葬制』二五～一四〇頁 江戸遺跡研究会
- 谷川章雄(一九九八)『瑞聖寺出土の伊達家の袍衣桶について』『港区文化財調査収録』第四集 一七～二二頁
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター(二〇〇〇)『東北大学埋蔵文化財調査年報』十三
- 榎木真(一九九四)『河越逸行氏寄贈資料』『新宿区立新宿歴史博物館研究紀要』第二号 一二七～一三一頁
- 似内啓邦・佐々木真史ほか(一九九八)『聖壽禪寺南部重直墓所発掘調査報告書』盛岡市教育委員会
- 根本信孝(二〇〇一a)『松平直矩墳墓』『白河市史四自然・考古』五六三～五七〇頁
- 根本信孝(二〇〇一b)『松平基知墳墓』『白河市史四自然・考古』五七一～五八〇頁
- 弘前市立博物館(一九八三)『昭和五七年度墓確認調査報告書 前の墓』
- 弘前市立博物館(一九八四)『昭和五八年度墓確認調査報告書 前の墓』
- 弘前大学国史研究会編(一九七七)『津軽史事典』名著出版
- 松本健(一九九二)『大名家の墓制』『國學院雑誌』九三～一二一～一三八頁
- 松本健(一九九八)『瑞聖寺旧伊達家墓所出土「袍衣桶」の保存処理に伴う調査』『港区文化財調査集録』四一～一六頁
- 陸奥史談会(一九五四)『陸奥史談』第三輯 報恩寺特大号
- 山川浩実(一九七五)『慈光寺蜂須賀家・藩士墓出土遺品の研究』